第２課　聖書の起源と性質

【暗唱聖句】

「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」第一テサロニケ　2章13節

【日曜日・聖書の神の啓示】

**「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです」ペトロの手紙二1章16節**

聖書の御言葉は巧みな作り話ではなく、主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、実際に自分たちが目撃したことを書いたのだとペテロは言っています。しかも、「決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったもの」（第二ペテロ1:21）であり、それゆえに真実であり信頼でき、「何一つ、自分勝手に解釈すべきではない」のです。聖書はまさに聖なる書物なのです。

ペテロ自身、「荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声を…聖なる山にイエス様といたとき、天から響いて」くるの聞きました（ペトロの手紙二1章17、18節）。このことによって、「預言の言葉はいっそう確かなものとなっ」（第二ペテロ1:19）たと確信しています。

また、「まことに、主なる神はその定められたことを、僕なる預言者に示さずには何事もなされない」（アモス3:7）とあるように、神様は様々な方法を通してご自身、あるいは御心を啓示されます。その中でも最たる神様の啓示が聖書であるわけです。たとえば、「夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意していてください」（ペトロの手紙二1章19）と、ペテロは言います。大きな暗闇に覆われてしまうような困難な中でも、空には明けの明星が昇るように、心の中にもイエス・キリストという明けの明星、希望の光が必ず昇るから、そのときまで暗い所に輝くともし火として聖書の御言葉を心に留めるようにと言うわけです。これは御言葉を通して、その中に啓示されているイエス・キリストが明けの明星のように心の中に昇り、闇を光に変えて下さるからです。

【月曜日・霊感の過程】

聖書はすべて神様の霊感によって導かれ、人を通して書かれています。そころで、この霊感に導かれて書くとは、具体的にどういうことでしょうか。

**「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう」申命記18章 18節**

確かに預言者は、神様から直接言葉を授けられ、その言葉を民に語りました。どんなに厳しい言葉であったとしても、それをストレートに語らなければなりませんでした。しかし、聖書が書きあげられていく過程においては、一言一言神様の言葉を逐語的書いたものもありますが、資料を研究したり、手紙などでは書いた著者の思いが込められていることもあります。また、そこにはある程度書いている人の個性が反映されてもいるでしょう。しかし、それでも神様からの言葉であることには変わりはありません。だから、**「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益」（テモテ手紙二3：16）**なのです。

【火曜日・書き記された神の言葉】

主はモーセに、「これらの言葉を書き記しなさい」（出エジプト34:27）と言われました。人間の記憶は曖昧なものです。神様に言われた言葉であったとしても、時間の経過と共に忘れてしまっても不思議ではありません。また、頭の中にしまっておいては、モーセはわかっていても他の人にはわかりません。特に、時代を経た今日の私たちには全くわかりません。預言者の使命は、神様の言葉を預かって、それを民に正確に伝えることにあります。そのためには書き留めるのが一番でした。だから、このように神様が命じられたとしても何ら不思議ではありません。また、ヨシュアは「これらの言葉を神の教えの書に記し・・・」（ヨシュア24:26）とあるように、神様からの言葉を「神の教えの書」を作って書き留めることを習慣としていたことがわかります。

　さらに「イスラエルの神、主はこう言われる。わたしがあなたに語った言葉をひとつ残らず巻物に書き記しなさい」（エレミヤ書30章2節）とあるように、都合の良い言葉あるいは都合の悪い言葉を選ぶことは許されずすべての言葉を書き記したことがわかります。わたしたちも聖書の言葉のつまみ食いではなく、嬉しい言葉も厳しい言葉もそのまま受け止めることが大切です。

　また、黙示録では、「玉座に座っておられる方が、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた」（21章5節）と、神様自ら自分の語った言葉は真実であるから書き記せと強調し、「これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる」（黙示録22：19）と、絶対に聖書の言葉を書きくわえたり、取り除いたりしてはならないと付け加えています。

【水曜日・キリストと聖書の類似点】

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1:14）と表現されています。聖書は神様の言葉であるわけですが、その言葉が肉となって私たちの間に来てくださったのがイエス様なのです。両者にはいくつかの類似点があります。まずどちらも間に人間が介在しているという点でしょう。イエス様は超自然的に胎内に宿られましたが、女を通してお生まれになりました。かたや聖書の超自然的な起源をもちながら、人間の手を通して書かれました。次に、イエス様は時間も空間も超越して存在する方ですが、地上においては特定の時代の特定の場所で生活されました。聖書も特定の時代に特定の場所で、時には特定の人たちに向けて書かれましたが、時代を超え、国を超えて神様の言葉として受け止めることができます。さらにイエス様が人間のレベルまで下りてきてくださったように、聖書の言葉も人間の能力や文化、生活に密着する形で表現されています。

**「神から与えられた真理が人間の言葉に表現されている聖書には、神的なものと人間的なものとの結合がみられる。このような結合は神の子であると同時に人の子でもあったキリストの性質の中にもあった」各時代の大争闘**

【木曜日・信仰によって聖書を理解する】

**「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです」ヘブライ人への手紙11章3節**

神様の言葉によってこの世界が創造されたということは、信仰がなければ信じることのできないことです。それと同様に、聖書の言葉を正しく理解するためには信仰が必要です。幼子のように信じることができなければ、正しく理解することはできませんし、御言葉の力がその人のうちに現わされることもありません。聖霊が一人一人のうちに働くとき、信仰も深まっていきます。

　また、「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」（へブル11:6）とあるように、信仰は聖書に対して目を開かせ理解させてくれるのみならず、神様に喜ばれるために無くてはならないものでもあります。